

早稲田大学大学院日本語教育研究科

2010年9月

博士学位申請論文審査報告書

論文題目：留学生活における言葉の学びと日本語教育
韓国人留学生のライフストーリーから

申請者氏名：三代 純平

主査 細川 英雄（大学院日本語教育研究科教授）

副査 川上 郁雄（大学院日本語教育研究科教授）

副査 宮崎 里司（大学院日本語教育研究科教授）

本論文は、韓国からの留学生（就学生等を含む）が留学生活を通じていかなる学びを形成し、それを支えるためにいかなる日本語を必要としているのか、そしてその日本語をいかに学んでいるのか、または学ぶことにどんな困難を抱えているのか、ということ、ワーキングホリデー・専門学校生・文系大学生それぞれの韓国人留学生のライフストーリーから明らかにしたものである。また、社会的状況として、留学生政策が、留学生の日本での就労を視野に入れて展開していることから、留学生が日本で生活していくことを支えていく形で日本語学習の支援の在り方を考えなければならないことを論じている。

本研究は、客観的な能力の獲得を目的とした日本語教育に批判的な立場をとりつつ、学習者一人一人の実感から、言葉の学びとは何かという課題に迫ろうとしたものであり、主観的な学びへのアプローチから、従来のコミュニケーション能力には含まれてこなかった、コミュニティ参加のプロセス全体をことばの学びとすることの意味を明らかにしようとするものである。

本論文の評価すべき点は、以下の4点である。

評価点（1）丹念なインタビュー調査とその記述の姿勢

留学生一人一人に対する丹念なインタビュー調査によって、それぞれの置かれた状況の中での留学生自身の学びや苦悩を生きた声として描き出していることが評価できる。申請者の指摘するように、ライフストーリーから言葉の学びを考えるという研究は、先行研究もほとんどない。また、その分析方法・記述方法もこれからの研究開発が期待されている状況である。そのような中で、「私」と言う一人称の責任のもとで記述するようにし、「できる限り、協力者が読んでも理解ができるようなものにしたい」という記述の姿勢は、専門的な研究論文というジャンルを超えて意味のあるものだと判断する。

評価点（2）ことばの活動と関係性への指摘

本論文の主張として、「言葉は関係性の中で学ばれる」ことが重要であるとし、以下の3点を挙げている。

- 1．言葉は関係性の中で学ばれる。
- 2．相互行為としてコミュニケーションは成立する。
- 3．関係性自体がコミュニケーションを支えている。

さらに、これを受けて、「言葉の学びは、言葉を学ぶ共同体の中にあるのではない」とし、

「留学生が、参加しなければならない、または、参加したいと思うコミュニティへの参加の中にある」ことを指摘する。これは、「コミュニティ参加」自体を言葉の学びとして捉える申請者の立場の表明でもあり、留学生活において、自分が居場所とするコミュニティへの参加、そこで築いた人間関係こそが言葉の学びだという主張ともつながっている。そうした関係性の構築自体が、言葉の学びの中心にあることを指摘した点が言語教育への鋭い示唆となっていると評価できる。

評価点(3)「能力」から「場」への議論のシフトという提案

日本語教育の目的として、コミュニケーション能力など、能力の育成を中心に議論されるだけではもはや十分でないことを指摘し、留学生活を支援するためのコミュニケーションを考え、多文化共生社会の構想へと向かうならば、そのために、日本語教育の現場は、どのような「場」なのかということを考える必要があるとする提言が重要である。個人の能力の育成を目指してきた、これまでの日本語教育の言語学習観自体が、コミュニティ参加という言葉の学びを分断していると批判し、新しいパラダイムとして、「能力」から「場」への議論のシフトという提案を行っている点が評価できる。さらに、日本語の教室は、そのためにどのような場所であるのか。この具体的な議論が必要であることを指摘し、日本語教育の目的の再構築の必要性を説く。日本語教育がどのようなコミュニティを構想し、日本語の教室は、どのようなコミュニティであるのか、どのような学びの場となっているのか、という場についての議論が、どのような能力を育成するのかという議論にとって代わるべきとする提言は、これからの日本語教育の一つの方向性として注目に値しよう。

評価点(4)「言語学習観の転換」という視点と提言

考えるべき問題として、言語学習観の転換を挙げている点を評価したい。

ことばの学びの実感と言語学習観、日本語教育への期待は乖離していることを指摘したうえで、そのことが、日本語教育と社会とのつながりを分断し、コミュニティ参加という言葉の学びを日本語教育の中で目指すことを困難にしているとする。

言語学習観が社会的に形成されていることを確認しつつ、日本語学校が進学準備機関として担っている役割の形や、専門学校における日本語補習授業、大学で行われている日本語教育、さらに、言語能力を測るさまざまなテストが、「能力」の外側にある豊富な学びを、言葉の学びとして認識することを拒んでいるとする。さらに、このような組織化を認める、

言語能力へ対する社会的言説の転換を試みなければ、言語学習観を変えることはできないと述べる。すなわち、社会的に、コミュニティ参加という言葉の学びの重要性について共有していくことが、日本語教育や留学生受け入れ制度、機関の再構成に必要だとし、そのような言語学習観の転換へ向けて、学習者の学びの実感から、従来の言語学習観を脱構築しようとする視点は、きわめて重要である。

以上のような評価点によって、日本語教育全体に対して本論文が持つ意味について、付言したい。

「言語能力を測るさまざまなテストが、「能力」の外側にある豊富な学びを、言葉の学びとして認識することを拒んでいる」という提言は、理論的には評価されるが、現実には、能力評価を基にした教育が現存する以上、実践に基づく、具体的な代案を示す必要があるとする立場を想定することができる。

この問題について、暫定的な方向性ではあるが、共同研究の一部として、現在行われている「討論プロジェクト」の一端とアクションリサーチ研究の方向を提出したことには大きな意味があると考えられる。

「能力」から「場」へ議論を展開しても、学習者はその「場」で何かを学ぶわけであるから、その「場」で学んだこと、あるいはそのプロセスで得たものがその後の生き方に影響していくという意味で、それは紛れもなく「ある力」と表現されるであろう。つまり、それが意味するのは、従来の言語能力観から脱して、あらたな「言葉と力」を得るということではないか。換言すれば、それは、実践者の言語能力観の脱構築ということだろう。

ここで求めることは、その具体的な姿としての「拙速」の処方箋的代案ではない。こうした実証的なライフストーリー研究を踏まえ、申請者自身がどのような教育実践を展開していくかという思想的課題なのである。「能力」から「場」への議論のシフトあるいは「言語学習観の転換」という視点という発想から、その構想は具体的にどのように設計・実施されるのかという問題こそが日本語教育学の本来的な問題であるからだ。それは単に一つ一つの教室設計のレベルにとどまることなく、言語教育政策としての日本語教育そのものを言語教育全体の中でどのように位置づけていくのかという問題と直結している。日本語教師一人ひとりがその問題にどのように関わるのかという課題が申請者自らの教育実践として提示されることを期待されていると考えることができよう。

本研究の意義は、客観的な能力の獲得を目的とする日本語教育に対して批判的な立場をとりつつ、学習者一人一人の実感から、ことばの学びとは何かというテーマに迫ろうとしたことであり、主観的な学びへのアプローチから、従来のコミュニケーション能力観には含まれてこなかった、コミュニティ参加のプロセス全体をことばの学びとすることの意味を明らかにしたことであった。

以上のような意味において、本論文は、優れた学術研究として高く評価することができ、本論文を以って博士学位請求論文に値するものであると判断する。